

## 特別講義

日本の老いの文化—民俗学の視点から—

関沢まゆみ（国立歴史民俗博物館）

### 1 民俗学の老人論

これまで民俗学において老人を論じたものとしては、古くには柳田国男、折口信夫らの老人論があり、近年のものでは宮田登や山折哲雄の老人論がある。柳田は先祖のイメージとしての老人を、折口は「翁の発生」に代表されるように芸能化された翁を中心に論じた。柳田や折口は老人を通して先祖の霊や神についての理解を十分にしようとしたのであった。その後、1980年代以降、宮田登や山折哲雄らによる老人論・子供論が試みられるようになるが、それはV.ターナーの中心・周縁論を援用したものであった。老人と子供を大人に対してその周縁的存在として位置づけ、両者のもつ霊性や神聖性が指摘されたのである。このように柳田、折口の老人論から宮田、山折の老人論にいたるまで、子供・老人の霊性や神聖性などが指摘されてきたが、ただそれらはいずれもイメージとしての老人観が先行しており、実生活の中の老人を直接観察したデータにもとづく論ではなかった。

### 2 宮座と長老

近畿地方やその周辺、若狭地方や伊勢志摩地方の村落には村落運営から引退した後のつとめとして高齢の男性たちが氏神の世話など一定の信仰的な役割を担うことが定められている村落が多い。それらの村落における伝統的な氏神の神社の祭祀組織は宮座と呼ばれ、歴史学や民俗学、社会学の分野において、その祭祀組織としての側面についての研究は長く行われてきた。そして長老制や当屋制と呼ばれる仕組みに宮座の特徴があると認められてきた。筆者はこの宮座の担い手が老人であることに注目し、宮座を従来の祭祀組織としての分析だけでなく、老人個人からの分析をも合わせ行うようにしてきた。

ここではその研究成果の一部を紹介する。一つは、滋賀県甲賀郡水口町北内貴の十人衆と呼ばれる宮座の長老衆の例、もう一つは、奈良市大柳生の八人衆と「明神様」と呼ばれる氏神の分霊を預かる当屋の例である。

これらの事例から指摘できるのは以下の点である。第一に、宮座の長老の権威の淵源とは次の3つによるものである。①年齢や年玉を重ねていること、つまり長寿の生命力に対する尊崇の念である。②宮世話や神祭りの奉仕の実績である。③過去の事実である歴史や由緒を知っていること、つまり物知りであるということである。第二は、宮座の長老といえども日常生活の中ではただの老人である。しかし、その老人が宮座の役をつとめることによって変わっていく、自己変革していくという点である。成長する柔軟な若者世代に固有と考えられている自己変革が宮座という組織と制度のなかでは老人においても見出されるのである。

〈参考文献〉

柳田国男「明治大正史世相編」(『柳田国男全集』26 ちくま文庫) 1990年(1931)、同「先祖の話」(『柳田国男全集』13 ちくま文庫) 1990年(1946)、折口信夫「翁の発生」(『折口信夫全集』2 中央公論社) 1975年(1928)、山折哲雄『神から翁へ』青土社 1984年、宮田登『老人と子供の民俗学』白水社、1996年、宮田登・新谷尚紀編『往生考—日本人の生・老・死—』小学館 2000年、関沢『宮座と老人の民俗』吉川弘文館 2000年、同『隠居と定年—老いの民俗学的考察—』臨川書店 2003年